

氏名(本籍)	しまだけいじ (福島県)		
学位の種類	博士(教育学)		
学位記番号	博乙第1,368号		
学位授与年月日	平成10年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	教育学研究科		
学位論文題目	H. C.マッコーンの教科外活動理論におけるガイダンスに関する研究		
主査	筑波大学教授	山口	満
副査	筑波大学教授	体育学博士	飯田 稔
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	渡辺 光雄
副査	筑波大学教授	博士(教育学)	田中 統治

論文の内容の要旨

本研究は、アメリカ合衆国（以下、米国）のH.C.マッコーン（McKOWN, Harry Charles. 1892～1963）が教科外活動（extracurricular activities）の理論の中で説いたガイダンスの内容を考察することを通して、教科外活動ではガイダンスはどのように行われるべきなのであるかという教科外活動におけるガイダンスの在り方を明らかにすることを目的としている。そして、この目的を達成するために、マッコーンの教科外活動の理論が(1)教科外活動の目的論、(2)教科外活動における生徒に対する見方・考え方（生徒観）、(3)教科外活動の指導における技術と過程という3つの柱（三層構造）から成っていることに着目して、次のような五つの研究課題を設定している。

- (1) 教科外活動の目的論における課題としてのガイダンスの在り方の解明
- (2) 教科外活動の生徒観における課題としてのガイダンスの在り方の解明
- (3) ホームルームにおける課題としてのガイダンスの在り方の解明
- (4) ホームルーム以外の教科外活動の場における課題としてのガイダンスの在り方の解明
- (5) 実践の課題としての教科外活動の技術におけるガイダンスの在り方の解明

これら五つの課題は、本論文を構成する基本的な内容でもある。

研究方法は、マッコーンの15冊の主要著作を中心とした文献研究であるが、紳士録に「教育者、著者、講師」として紹介されているように、彼が大学教師（ピッツバーグ大学）、講演、雑誌「学校活動」の刊行など多彩な活動を通して米国における教科外活動の理論の形成と実践の展開に影響を与えていたことに注目して、著作以外の論文、雑誌の記事、講演活動の記録など広く文献資料の収集にあたり、それを活用している。

また、中心的な文献である『教科外活動』（1927, 1937, 1952）および『ホームルームガイダンス』（1934, 1946）については、初版から3版あるいは2版までの経緯の考証とそれらの著作の中でのガイダンス論の位置について考察し、本研究における資料としての価値と位置を明らかにしている。

本論文は、序章、第1章～第10章、終章から成る。1ページ1400字詰めで、322ページに及ぶ大作である。その概要は、以下の通りである。

「序章」では、米国の教科外活動の研究分野におけるマッコーン的位置、本研究における課題の設定と理由、特別活動と米国の教科外活動の関係、マッコーンの教科外活動理論におけるガイダンスに対する先行研究、本研

究の目的、本研究の方法、本研究における用語の取り扱い、本研究の内容の構成、本研究の意義が示されている。ここでは、本研究で取り扱われる用語の意味について、詳細な検討が行われていることを指摘しておきたい。

「第1章 H.C.マッコーンの教科外活動研究におけるガイダンスの位置」では、マッコーンの教科外活動に関する研究は彼の生き方と一体であること、本研究の中心的な文献である『教科外活動』『ホームルームガイダンス』の位置、彼の著書、論文におけるガイダンスの位置が明らかにされた。

「第2章 H.C.マッコーンの教科外活動の理論を考察するガイダンスの視点」では、マッコーンの教科外活動の理論を通してガイダンスの在り方を探究するためには不可欠な章であるという視点から、(1)ガイダンスにおける教師の役割と教科外活動の関係、(2)偶発的ガイダンスと教科外活動におけるガイダンスの関係、(3)A.J.ジョーンズのガイダンスの理論という3点に絞っての考察が行われた。

「第3章 H.C.マッコーンの教科外活動の目的論におけるガイダンス(1)－教科外活動の基本的な目的におけるガイダンス－」と「第4章 H.C.マッコーンの教科外活動の目的論におけるガイダンス(2)－教科外活動の目的の諸相におけるガイダンスと教科外活動の目的の評価－」は、いわばセットである。第3章では、生徒自らが努力するという意味を持つ自己指導 (Self-Direction) の助成が教科外活動におけるガイダンスの在り方の基本であることが明らかにされた。第4章では、社会的協力の育成、生徒の興味の助長、スクールモラルの高揚、規則と秩序に対する感情の育成等の教科外活動の具体的な目標を取り上げて、これらの項目を通して教科外活動におけるガイダンスの在り方を考察している。

「第5章 H.C.マッコーンの教科外活動理論の生徒観におけるガイダンス(1)－生徒観の基礎理論におけるガイダンス－」と「第5章 H.C.マッコーンの教科外活動理論の生徒観におけるガイダンス(2)－生徒観の各論におけるガイダンス－」も、いわばセットである。第5章では、教科外活動における生徒観の基礎理論として、(1) 生徒観の前提、(2) 教育の基礎としての生徒観、(3) 基礎的な身体的情緒的变化という三つの事項を取り上げている。第6章では、マッコーンが好奇心、移動、社交性、忠誠心、承認、同情、習得、模倣、性等に分けている青年期の基本的衝動を取り上げ、次いで個人差と精神的情緒的健康を取り上げている。これらの内容は生徒の人格の尊重に基づく生徒観であり、その内容を通して教科外活動におけるガイダンスの在り方を考察している。

「第7章 H.C.マッコーンのホームルーム理論におけるガイダンス(1)－ホームルームの目的論におけるガイダンス－」と「第8章 H.C.マッコーンのホームルーム理論におけるガイダンス(2)－ホームルームにおける領域別ガイダンスの内容－」も、いわばセットである。第7章では、ホームルームの目的におけるガイダンスの位置を明らかにし、ホームルームにおける計画的なガイダンスが重要であることを考察している。第8章では、ホームルームにおける領域別ガイダンスを通してガイダンスの在り方を考察している。

「第9章 ホームルーム以外の教科外活動の場におけるガイダンス－H.C.マッコーンにおける教科外活動の目的論と生徒観を通して－」では、ホームルーム以外の教科外活動の場の計画的なガイダンスが重要であることを考察するとともに、教科外活動におけるサポートの意味も考察している。

「第10章 H.C.マッコーンにおけるガイダンスの在り方としての教科外活動の技術」では、共著『授業への視聴覚的手段』(1949)における教科外活動の技術に関連する内容と、ガイダンスにおけるマルチメディア・アプローチの理論を結合させるという方法によって教科外活動の技術としてのガイダンスの在り方を考察している。

終章では、序章で述べた本研究の目的と五つの課題に基づいて、教科外活動におけるガイダンスの在り方を探求した結果、明らかになったことと今後の課題、展望について考察している。即ち、教科外活動の基本的な目的としてマッコーンが位置付けている生徒の自己指導の助長は今日的に極めて重要であること、彼が教科外活動における生徒観の中に自己指導を位置付けていることも、同様に重要であること、ホームルームにおけるガイダンスの内容が豊富であること、彼が教科外活動は生徒にとって環境であるとし、「教育者」という言葉で教師の在り方を説いていることは、ガイダンスの基盤として大切であること、生徒の継続教育と余暇の活用が大切である

ことを強調していることは、教科外活動と生涯学習の接点を探求する上で示唆に富むことなどの点について、まとめと考察を行っている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、マッコーン理論の検討を通して教科外活動におけるガイダンスの固有の在り方を明らかにした学術研究の成果として高く評価される。特に、教科外活動の理論を、目的論、生徒観および指導の技術と過程という三層においてとらえ、それぞれの領域におけるガイダンスの在り方を具体的な内容に即して明らかにしたことは、本論文のすばらしい成果である。

また、本格的なマッコーン研究として、米国でもわが国でも最初のものであり、学術的価値の高い基礎的研究として、学術的な研究の成果に乏しい教科外活動・特別活動研究やガイダンス研究の進歩に貢献するところが大きい。

よって、著者は博士（教育学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。